

鎌倉古道

なごやの

をさがす

【1】

鎌倉街道…義経、頼朝の通った道

—— 連載のはじめに ——

平安時代の末から鎌倉、室町とつづく400年程の間、名古屋にも鎌倉街道といわれる古道が通っていました。今ではほとんど残らない道陰ですが、いくつかの文献や史跡からその姿が見えてくる所があります。今回は古道のその姿を追って、名古屋の街の前史にチャレンジしてみたいと思います。

1 五つの東海道

東海道は日本の東西を海沿いに結ぶ道ですが、これまで時代とともにいくつかの性格の異なる道がありました。古代、中世、近世、近代そして現在の、各東海道です。

東海道とは元々7世紀に律令制の中で、全国を五畿七道の地域に分けたときの七道の名前の一つでした。含まれる国は、伊賀、伊勢

に始まり尾張、三河を経て常陸までの15カ国でした。それが、次第に都からそれらの地域の国府を貫く道路のことも東海道と呼ぶようになりました。(図1) この道は駅路といい、広幅員で真直くな道路だったといえます。

ところが、律令制が崩れた平安時代末になると、都と東国を結ぶ道として新しい東海道が登場します。それは鎌倉に成立した幕府と都とを結ぶ道として明確になり、京・鎌倉往還と呼ばれました。これが、2番目の東海道になります。

3番目はよく知られた江戸時代の東海道です。徳川幕府の五街道の第一とされた、京都と江戸の幕府を結ぶ最重要幹線でした。そして4番目は、明治政府によって明治の初めに指定された国道東海道であり、5番目は当初「東海道幹

図1 古代律令制の五畿七道
(東からの道は右から表示した。文献①)



線自動車道」と呼ばれた現在の東名高速になります。

この連載で訪ねる鎌倉街道とは、この中の2番目、中世の東海道である、京・鎌倉往還になります。

2 鎌倉街道と呼ばれる道

今日、鎌倉街道と呼ばれている道は大きく二つに分けることができます。一つは東国一帯に展開した幕府の御家人が、「いざ鎌倉」という時に鎌倉に駆けつけるための道です。もう一つはここで言う鎌倉街道、即ち上述した幕府と都を結ぶ東海道、京・鎌倉往還になります。

(1) いざ鎌倉の道

いざ鎌倉の道は東国に分散した武士団と幕府とを結ぶ道です。普段は御家人が鎌倉の警備などに通う道でしたが、非常時には「いざ鎌倉」と騎馬で幕府に駆けつける道でもありました。このため、街道は1本ではなく東国一帯に分布していました。

その主なルートは3つに分かれ、一つ目は信濃や上野方面から武蔵府中を経て鎌倉に向かう「上ノ道」。2つ目は奥州や下野方面から江戸山手を通る「中ノ道」。そして3つ目は常陸や房総方面から江戸湾沿いに、あるいは海を渡って鎌倉に向かう「下ノ道」です。この他に、上の道の途中から西に秩父を通る道の道ということもありますが、道はおおむね上述の3本に集約できます。(図2)

それぞれの道には物語がありました。下ノ道は初期に頼朝が鎌倉を目指した道であり、中ノ道は奥州の平泉を結ぶ道として義経が通り、最後は頼朝の奥州攻めで確立されました。また上ノ道は、皮肉にも後年に新田義貞が鎌

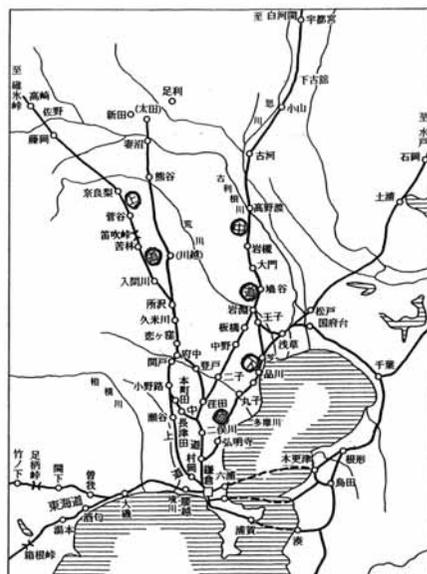


図2 関東地方の「いざ鎌倉」の代表的な道筋(道と駅)木下良

倉に攻め上り、幕府が崩壊する道になったのです。

これらの道は現在の神奈川県を出て東京都を通ります。このため東京では、上ノ道は府中、国分寺を、中ノ道は目黒、渋谷、新宿の線を、下ノ道は品川、霞ヶ関、浅草の線を通っており、いくつもの地点で街道の跡が見られるといえます。

(2) 京・鎌倉往還

もう一つの鎌倉街道である京・鎌倉往還は東国の成長とともに生まれた都と鎌倉を結ぶ道でした。政治の道であるとともに、源平の時代には多くの軍隊が通った道でもあります。

ルートは、古代の東海道とは異なり、京都からは東山道を通して美濃に入ります。東山道と別れて木曾川を渡り、南に尾張を横切ります。そして古代の東海道に入って、三河から東に鎌倉へと向かう道でした。(図3)

この道は、正式には、壇ノ浦の戦いの後の

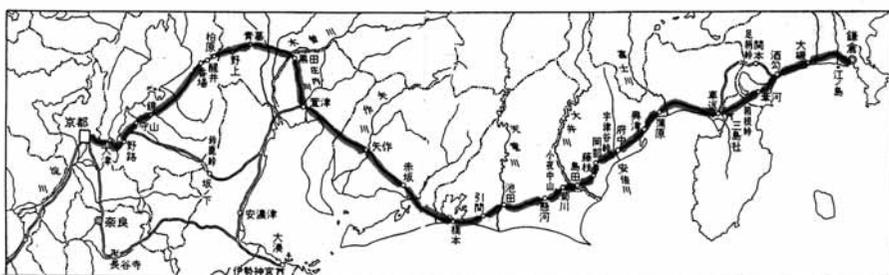


図3 京・鎌倉往還。名古屋付近には萱津の名があります(文献①)

1185年、駅路之法として、沿線の荘園に伝馬や食料を負担させたのに始まります。ただこの頃はまた鎌倉方と荘園との力関係から、十分に実施できませんでした。そして1192年の幕府成立の前後、頼朝の2度の上洛の時に橋などの交通施設が整備され、街道としての形態が整うとともに、「宿(シク)」と呼ばれる宿場も出来始めました。

ところがこの宿の設置や管理は各地の守護や地頭に任せられたため、全区間で保障されたものとはなりません。古代の東海道が国家によって維持されたのに対し、中世の街道は地方にまかされたようです。

とはいえ交通量の増加とともに、宿は道の分岐店や大河・山岳の前後、あるいは地域の政治経済の拠点などに成長していきました。そして京・鎌倉往還には63次といわれる宿が形成されていったのです。

3 名古屋付近の鎌倉街道

それではその鎌倉街道は、名古屋付近ではどこを通っていたのでしょうか。まず文献や史跡を手がかりに、街道ルートの大きな流れを探ってみたいと思います。

(1) 名古屋と歌枕

歌枕とはいろいろな和歌に詠まれて広く知られた場所を指します。歌枕は街道を旅する人によって歌われ、上方にも伝わりました。その歌枕が名古屋付近にもいくつかあります。古代、万葉集に詠まれた歌の中にも、「あゆ



南区桜付近

ち瀧」、「桜田」とか「あゆちの水」等があります。これらは名古屋の東南部、瑞穂区や南区の付近でしょうか。

中世になると、数も多くなり、その地点が浮かび上がってくる所もあります。その地名のいくつかを北から南に並べてみると次のようになります。

萱津、古渡、熱田、音間山、上野、呼続、野並、星崎、鳴海、二村山

これらの中には場所に多少異論のあるものもありますが、大きな流れとしては名古屋を西北から東南に斜めに横断しているように見えます。

(2) 紀行文から見た鎌倉街道

平安時代になって旅の紀行文が書かれ始めました。鎌倉街道に沿っては、古いものでは11世紀の『伊勢物語』や『更級日記』があります。後者には、「尾張の国鳴海の浦を過るに、夕潮ただ満ちに満ちて…」と鳴海瀧(天白川の下流)を急いで渡ったことや二村山で野宿したことが記されています。

その他にも、1223年の『海道記』では萱津から熱田、鳴海を通り、1242年の『東関紀行』では萱津の東宿での市の賑やかさや熱田の宮、二村山のことが記されています。また1277年の『十六夜日記』では熱田に参り鳴海瀧を抜け二村山を越えたとされています。

(3) 江戸時代の探求と残る史跡

1601年に近世の東海道が制定され、鎌倉街道はその役目を終えました。江戸時代の文献では、その古道の跡を紹介したり推測したりしています。



◀ 甚目寺町萱津付近

▼ 瑞穂区井戸田付近



たとえば、いろいろな絵図には「古の鎌倉海道」などと記入され、また『尾張地名考』や『尾張徇行記』、『尾張名所図会』などにも鎌倉街道の記述があります。個々の記述は今後順次紹介していくとして、これらの記述もまた、大きく見れば名古屋の西北から東南への流れを示しています。

街道に直接関わるような史跡は名古屋にはないようですが、通過地を裏付けるような場所はいくつもあり、この道は古道跡に違いないとされる所も各所に見られます。(写真)



南区笠寺付近



豊明市二村山付近



緑区相原付近

(4) 名古屋の鎌倉街道

以上のように見てくると、名古屋の鎌倉街道ルートは、甚目寺町の萱津を西北端とし、東南端を豊明市の二村山にしていることがわかります。そして途中で古渡・熱田付近を経由して、名古屋を斜めに横断するようになっていたことは、ほぼ間違い無いように考えられます。

途中のポイントを想定すると、萱津からは庄内川を渡って中村を通り、露橋で向きをや

や東に振って古渡に出ます。そこからは少し幅が出てきますが、東側のルートではすぐ御器所台地に渡り南下して井戸田に向かう道、西側のルートでは熱田に寄って笠寺台地に行く道です。その後も、東側では中根から島田まで迂回して鳴海(今よりも広い意味の)に行くルートと、西側では笠寺から東に鳴海に行くルートがあります。そして両ルートとも二村山に向かうのです。(図4)

4 四百年という長さ

鎌倉街道は今からおおよそ400年から800年前の道になります。それは古さとともに400年間という長さも問題になります。

たとえば名古屋のルートを決める大きな要因が、精進川(今の新堀川)と天白川の横断にありました。古代にはかなり奥まで海だったとされており、中世には海退現象等があったり、年とともに海岸線の後退がありました。また庄内川も大水によって川筋が動いていたとされるなど、800年から400年という昔は、今日の地形とは相当異なり、しかも動いていたと考えねばなりません。

この連載は、そんな中で、これまで成されてきた様々な街道の探求を紹介しながら、名古屋の街の中に埋もれた街道を探していくことになります。解が無かったり、あるいは幾つも有ったり、いろんなことが想定されますが、義経や頼朝の通った古道というロマンを追って回を進めて行きたいと思います。

〈主な参考文献〉

- ① 豊田・児玉編「交通史」(1970、山川出版社)
- ② 新城常三、日本歴史叢書「鎌倉時代の交通」(1967、吉川弘文館)
- ③ 阿部正道「鎌倉街道(東京編)」(1983、そしえて)
- ④ 湯之上隆「三つの東海道」(2000、静岡新聞社)
- ⑤ 市橋鐸「文学に現れた街道」(1971、『名古屋の街道』市教育委)

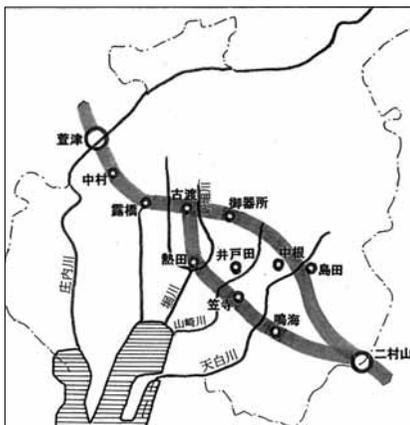


図4 名古屋市内の鎌倉街道の想定。古渡と二村山の間は図の2本の線の間にあつたようです